

投資モデルから見た大学生の社会関係の特性

—なぜ恋人関係は長続きしないのか—

松本 芳之

問 題

大学という場では、広範囲から同世代の学生が集まり、一般にそれまでよりも社会関係の幅が広がる。さらに、社会人と異なり、自らの対人感情や意志に忠実に、かなり自由に社会関係を選択することができる。たとえば、大学の集団活動であるサークルでは、気の合うメンバーと自分の好きな活動を行い、居心地が悪くなればいつでも離脱することができる。そして、この離脱行為には社会人のような責任を伴わない。このような意味で、大学時代は人生のなかでも特異な期間であるといえる。では、自由な選択が可能な大学生はさまざまな社会関係をどのように構築し、維持しているのだろうか。

この問題を考える手掛かりとなる理論に相互依存性理論 (Thibaut & Kelley, 1959) がある。この理論は社会関係を、関係を維持するためのコスト (cost)、関係から得られる報酬 (reward)、報酬からコストを引いた関係の成果 (outcome) によって捉える。その上で、成果を評価する基準には、比較水準 (comparison level) と選択比較水準 (comparison level alternative) の2つがあるとする。比較水準は、人がそれまで経験してきた成果をその時点で重みづけした平均値であり、満足を感じる成果の最小値を表す。過去に良好な社会関係を経験し、多くの成果を得てきた人ほど、満足の基準が高くなる。成果が比較水準を上廻ると関係を継続しようという意志が高まり、下廻ると関係解消への動機が高まる。しかしながら、現在の成果が比較水準を下廻り不満を感じさせるものであっても、それに代わる関係で期待される成果の水準が現在の成果よりも低ければ、関係は継続される。この代替肢の水準が選択比較水準である。この水準には、社会関係だけでなく単独で行動することでも期待される成果も含まれる。

その後、Rusbult (1980, 1983) は相互依存性理論を発展させ、社会関係に対する肯定的な感情を満足度 (satisfaction)、関係の継続意志を関係関与度 (commitment) とする投資モデルを提案した。満足度は「満足度 = (報酬 - コスト) - 比較水準」と定式化され、報酬が高くコストが低く、かつその差が比較水準を上廻るほど満足度が高くなる。また、関係関与度は「関係関与度 = 満足度 + 投

資量－選択比較水準」と定式化された。この投資量とはその社会関係に投入した資源の総和であり、これまで費やしてきた時間や自己開示などの内発的投資と、その社会関係と結びついている共通の友人や共有財産などの外発的投資の両方が含まれる。つまり、継続意志は、現在の関係から得ている満足度、関係を解消した場合の代替肢の水準、およびそれまでに関係に費やしてきた投資量の3つの要素に依存するのである。

このような相互依存性理論の視点に立つと、社会関係は利益交換の場と捉えることができる。この交換が適正に行われないと、いずれかの当事者が不満を抱くようになり、関係の解消へと向かうことになる。つまり、社会関係が維持されるためには、当事者の双方にとってその関係が満足できるものでなければならないのである。この基本原則はどのような社会関係にもあてはまると考えられる。これまで、投資モデルの視点から同一の指標を用いてさまざまな社会関係を比較することで、その特徴を同定しようとするのはあまり試みられてこなかったといえる。

Clark & Mills (1979, 1993) は、社会関係は交換関係と共同関係の2種類に大別できるとした。交換関係は基本的に短期間の関係であり、互いにとりたてて関心や責任を持つことがない。交換関係では、他者から与えられた利益は返すという返報性 (reciprocity) と衡平の原理に従うことで、互いの成果は均衡するようになる。つまり、人々は互いのコストと報酬を比較しながら成果が釣り合うように行動し、それによって双方が満足することのできる社会関係を目指すのである。一般の多くの社会関係は交換関係にあてはまる。他方、共同関係は、多くの場合長期の関係であり、互いに特別な関心や責任を抱く。共同関係における交換は、互いに相手のために何ができるかという必要性原理に従う。すなわち、相手が何を求め必要としているかに注目し、自分が支援する方がよいと感じたら自発的に行動する。親子や夫婦、友人などの親密な関係は共同関係にあてはまる。私たちは共同関係の中ではじめて、親密さを体験することができる。共同関係で重要なことは、相手を支援する際に見返りを考慮しないことである。事実、長期にわたって親密な関係を維持している人々を調べると、一貫して見返りについて考えないと述べるのが報告されている (Clark, Mills & Powell, 1986; Buunk & Van Yperen, 1991)。これは単に、長い目で見ればその時々釣合を考慮する必要がないというだけでなく、関係のあり方そのものが交換関係と異なっているのである。

ただし、共同関係であっても、夫婦や恋人、友人のような平等な立場の関係では、不均衡な交換が続くと次第に不利な側の不満が高まり、長続きしないと考えられる。このことは、長続きしている共同関係では、人々は必要原理にしたがって行動しているにもかかわらず、成果が均衡していることを意味する。これは、共同関係が交換関係と異なる経路をたどるためであると考えられる。交換関係では、目指すべき直接の目標は成果の均衡であるのに対し、共同関係の直接の目標はいわば配慮の均衡であり、成果の均衡はあくまでそれに付随する結果にすぎない。結局、人が他者の支援を必要とする事柄や量にはあまり違いがないため、配慮の均衡から成果の均衡が成立するのかもしれない。それゆえ、相互依存性理論の予測は、交換関係か共同関係を問わず妥当性を持つと予想される。以上の議論から、次の仮説が導かれる。

仮説 満足度, 投資量, 選択比較水準は, すべての関係で継続意志を予測する。

本研究は, この仮説を検証することによって, 人が体験しているさまざまな社会関係の特徴を把握しすることを目標とする。

方 法

調査対象者

調査対象者は, 大学生 90 人 (男性 39 名, 女性 51 名), 平均年齢は 21.0 歳 ($SD = 1.41$) であった。

質問紙の構成¹⁾

フェイスシートでは, 年齢と性別の記入を求めた。次いで, 大学生活の中で一般に経験する可能性がある恋人, 友人, サークル, ゼミ, アルバイトという 5 種類の社会関係について評価するように求めた。友人以外の社会関係では, 最初に, 現在, 該当する関係を実際に持っているかどうかを尋ね, 持っている場合にのみ回答を求めた。したがって, 個人によって回答する個数は異なる。この部分の具体的な内容は, 現在, 「交際中の相手 (恋人) がいるか」, 「サークル (またはそれに準ずる団体。部活や学生団体, 地域のクラブなど) に所属しているか」, 「ゼミナール (ゼミ) に所属しているか」, 「アルバイト (またはそれに準ずるもの。報酬が支払われるインターンを含む) をしているか」とした。なお, 友人については, 現在「最も親しくしている友人」を想定するように求めた。該当する場合は, それぞれの社会関係について, 満足度 (「私は○○に, 満足している。»), 投資量 (「私は○○のために (時間・金・気遣い, 配慮などの) 様々なものを費やしてきた。»), 代替肢の水準の低さ (以下, 代替肢の水準と記す, 「私は○○と, 私の生活上の満足感が低下する。»), 関係の継続意志 (「私は○○続けたい。») の 4 項目に回答するように尋ねた。○○の部分には, それぞれの関係に則した記述とした。たとえば, 恋人の場合, 満足度は「この恋人と交際していること」, 投資量は「この恋人」, 代替肢の水準は「この恋人との交際を辞める」, 継続意志は「この恋人との交際を」であった。サークルの場合, 満足度は「この団体に所属していること」, 投資量は「この団体」, 代替肢の水準は「この団体との関わらなくなる」, 継続意志は「私はこの団体にこれからも所属し」であった。回答はいずれも, 「非常にそう思う (10)」から「全くそう思わない (0)」までの 11 段階評定を用いた。なお, 代替肢の水準に関する質問では, 水準が高いほど, つまり代替肢が多く満足をもたらすほど, 得点は低くなる²⁾。

手続き

個別に質問票を配布し, 表紙の注意事項を一読させた後, 回答を求めた。

結 果

基礎統計量と関係間の比較

最初に、5種類の関係ごとに該当する人数、およびそれぞれの要素の基礎統計量を求め、表1に示した。友人は全員が回答した。該当する関係が最も少なかったものは恋人で33.3%であった。また、個人で関係が該当した数の平均は3.7個 ($SD = 0.96$)、レンジは1から5までであった。

次いで、関係によって要素の評価に差があるかどうかを検討するために、分散分析を行った。その結果、満足度 ($F(4,326) = 9.24, p < .001$)、投資量 ($F(4,326) = 8.64, p < .001$)、代替肢の水準 ($F(4,326) = 22.63, p < .001$)、継続意志 ($F(4,326) = , p < .001$) のすべてで明らかな差が認められた。そこで多重比較 (HSD Test による5%水準) を行うと、代替肢の水準と継続意志では、恋人、友人の群とゼミ、サークル、アルバイトの群の2つに大別され、それぞれの群内では差がなかったのに対し、群間では差が認められた。すなわち、恋人と友人は他の関係よりも、継続意志が高く、代替肢の水準が低かった。満足度も、恋人-サークルの対で差がなかったこと以外は同様の結果であった。しかし、投資量は、ゼミのみが他の関係より少ないだけで、それ以外の4つの関係の間には差が認められなかった。

次いで、5種類の関係の様態を要約するするために、4つの要素の平均値から関係間のユークリッド距離を求め、これを多次元尺度法で分析した。2次元解のストレス値は.005と、きわめて当ては

表1 関係別の対象者数と平均値 (標準偏差)

関係	N	満足度	投入量	代替肢の水準	継続意志
恋人	30	8.63 (1.77)	7.67 (1.77)	1.87 (1.83)	8.90 (1.60)
友人	90	8.84 (1.63)	6.64 (2.55)	2.07 (2.24)	9.37 (1.36)
サークル	73	7.63 (2.32)	7.58 (2.21)	4.41 (3.29)	7.08 (2.62)
ゼミ	59	7.27 (2.11)	5.27 (2.72)	5.17 (2.80)	6.95 (2.47)
アルバイト	79	7.44 (1.86)	6.62 (2.50)	5.22 (2.92)	6.73 (2.66)

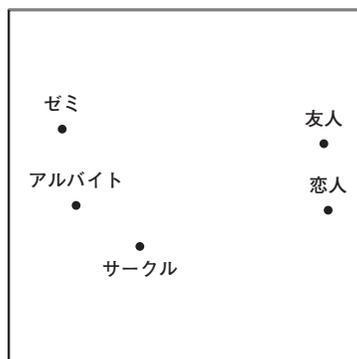


図1 多次元尺度法による関係の布置

まりがよかった。そこで、得られた座標をもとに5つの関係の布置を図1に示した。図から分かるように、第1軸(横軸)上で恋人、友人の群とゼミ、サークル、アルバイトの群が明確に分けられた。

継続意志の予測

まず、関係ごとにそれぞれの要素間の相関を求め、表2-1から表2-5に示した。ここで継続意志に注目すると、すべての関係で満足度および代替肢の水準との間に中程度の相関が認められた。すなわち、満足度が高く代替肢の水準が低いほど、継続意志が高かった。しかしながら、投資量との

表2-1 恋人との関係における変量間の相関 (N = 30)

	満足度	投資量	代替肢の水準
投資量	.44*	—	—
代替選肢肢	-.45*	-.60***	—
継続意志	.78***	.43*	-.63***

表2-2 友人との関係における変量間の相関 (N = 90)

	満足度	投資量	代替肢の水準
投資量	.21*	—	—
代替肢の水準	-.67***	-.40***	—
継続意志	.67***	.25*	-.52***

表2-3 サークルとの関係における変量間の相関 (N = 73)

	満足度	投資量	代替肢の水準
投資量	.34***	—	—
代替肢の水準	-.65***	-.26*	—
継続意志	.66***	.17	-.52***

表2-4 ゼミとの関係における変量間の相関 (N = 59)

	満足度	投資量	代替肢の水準
投資量	.39*	—	—
代替肢の水準	-.56***	-.64***	—
継続意志	.74***	.44***	-.67***

表2-5 アルバイトとの関係における変量間の相関 (N = 79)

	満足度	投資量	代替肢の水準
投資量	.22	—	—
代替肢の水準	-.50***	-.33**	—
継続意志	.69***	.20	-.54***

相関は満足度と代替肢の水準よりも一貫して低く、サークルとアルバイトでは有意でなかった。次いで、満足度、代替肢の水準、投資量の3つの要素が全体として継続意志を有効に予測するかどうかを確認するために、関係ごとに満足度、代替肢の水準、投資量を説明変数、継続意志を目的変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、すべての関係で投資量が削除されるとともに、恋人 ($F(2,27) = 31.01, p < .001$)、ゼミ ($F(2,56) = 50.97, p < .001$)、サークル ($F(2,70) = 31.28, p < .001$)、アルバイト ($F(2,76) = 42.82, p < .001$) では、満足度と代替肢の水準の2変量による予測モデルが妥当であった。また、友人では代替肢の水準も削除され、満足度のみの単回帰が妥当であった。そこで、図2に、友人を除く4つの関係について重回帰分析の結果の要約を示した。決定係数から、恋人に関する予測式が最も有効であったといえる。Rusbelt (1980) は、継続意志は3変量の合成変量に依存するとした。そこで、この予測値と継続意志の相関、および重回帰分析の結果を踏まえ、投資量を除いた満足度と代替肢の水準の2変量のみを用いた予測値(すなわち、満足度-代替肢の水準)と継続意志の相関を表3に示した。どの相関も有意であるものの、すべての関係で2変量による予測値の相関の方が高かった。

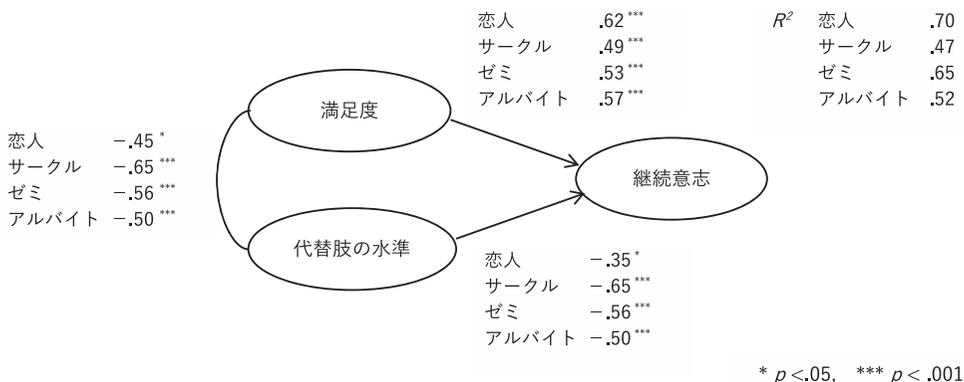


図2 4つの関係における継続意志を目的変数とする重回帰分析の要約

表3 2つの予測値と継続意志の相関係数

	恋人	友人	サークル	ゼミ	アルバイト
2変量による予測値	.82***	.64***	.67***	.79***	.68***
3変量による予測値	.75***	.58***	.61***	.73***	.61***

関係ごとのクラスタ分析

最後に、それぞれの関係の様態を検討するために、関係ごとに満足度、代替肢の水準、投資量、継続意志の4変量で個人をクラス分析(ウォード法)し、各クラスタの平均値、および採択したクラスタ数で要約した樹状図を図3-1から図3-5に示した。樹状図では、実線がクラスタ間の距離を

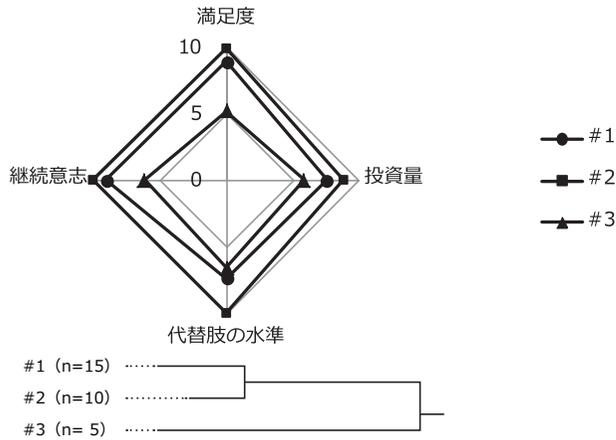


図 3-1 恋人の 3 クラスと平均値

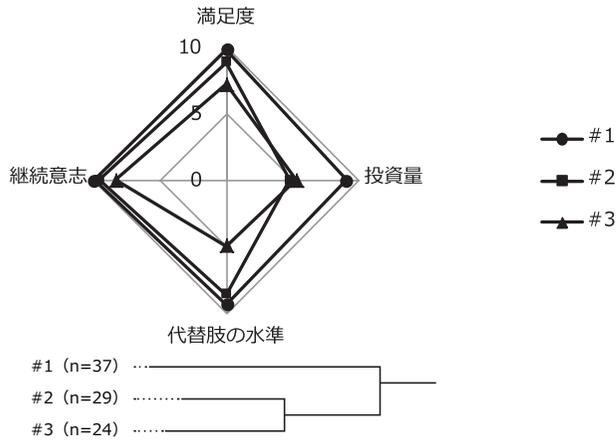


図 3-2 友人の 3 クラスと平均値

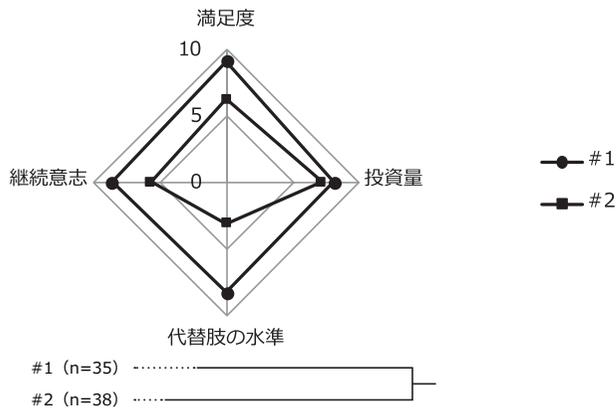


図 3-3 サークルの 2 クラスと平均値

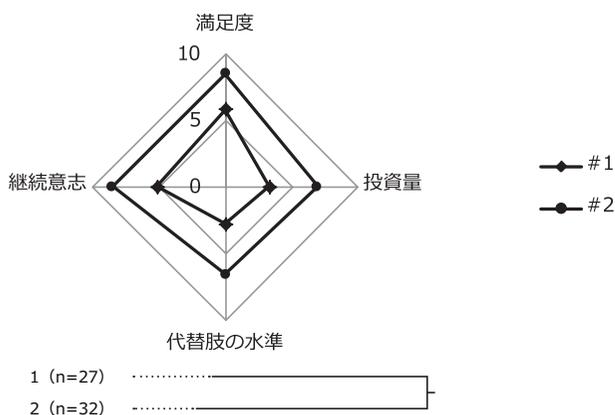


図 3-4 ゼミの 2 クラスと平均値

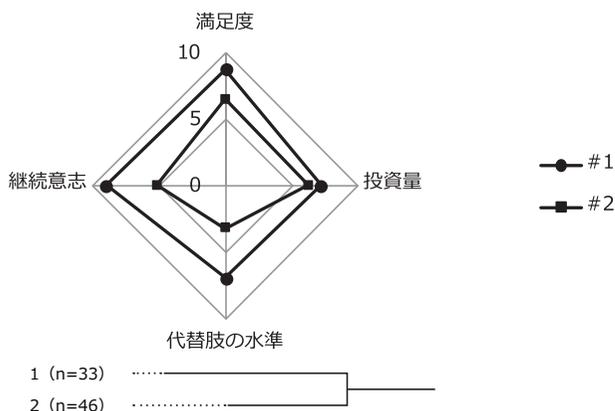


図 3-5 アルバイトの 2 クラスと平均値

表し、点線のところから下位クラスに分割されることを表す。以下、クラスは#で記した。まず、恋人との関係は3クラスに分けられた。樹状図が示すように、#2は満足度、投資量、継続意志とも非常に高く、代替肢の水準も極めて低かった。対照的に、#3は満足度、継続意志、投資量とも低く、代替肢の水準も高かった。その形状は#2を大幅に縮小させたものといえる。最も人数の多い#1は、満足度、投資量、継続意志は#2に近いのに対し、代替肢の水準だけが#3に近かった。友人との関係も3クラスに分けられた。#1は満足度、継続意志、投資量が高く、代替肢の水準も低かった。#2は満足度、継続意志、代替肢の水準は#1とほぼ同じであるものの、投資量のみが顕著に低かった。#3は#2に比べ代替肢の水準が高かった。次に、サークル、アルバイト、ゼミの関係は、いずれも全体的な評価が高いクラスと低いクラスという2群に分けられた。図3-3と図3-5から分かるように、サークルとアルバイトは、2群の形状が類似しているとともに、

投資量にはクラス間ではほとんど差がなかった。ゼミの特徴は投資量にあり、クラスとの間に大きな差が存在した。

考 察

本研究は、投資モデルに含まれる要素について直接評価するように求めることで、大学生が日々の生活の中で体験しているさまざまな関係を比較し、その特徴を明らかにすることを目的としたものである。

仮説は、関係の種類を問わず、その継続意志は Rusbult (1980) の投資モデルに適合するというものである。表2が示すように、継続意志と予測値との相関はすべて有意であった。その限りにおいて、仮説は支持されたといえることができる。しかしながら、重回帰分析の結果、投資量はすべての関係で継続意志の予測に有効でなく、継続意志は友人関係では満足度のみならず、またそれ以外の関係では満足度と代替肢の水準に規定されることが示された。継続意志との相関も投資量を除いた予測値の方が一貫して高かった。この結果は Rusbult (1980) の定式と異なる。投資量が有効でない理由は、埋没コスト (sunk cost) の観点から理解することができる。埋没コストを扱った多くの研究 (Rusbult, & Martz, 1995; Fox and Hoffman, 2002; Eisenberg, Harvey, Moore, Gazelle, & Pandharipande, 2012) は、過去に行った投資は将来について考える際には無視すべき要素であるにもかかわらず、人はそれに拘泥し、一層損失を重ねてしまうことを強調する。事実、金銭上の問題や集団の意志決定では、埋没コストは大きな影響を及ぼす。しかしながら、本研究の結果は、大学生の社会関係では埋没コストよりも現在の満足度が重視されることを示唆している。投資量はあくまでも過去に対する評価であり、完全に無視できるわけではないとしても、現在の満足とそこから期待される将来のあり方の方がより重要であるとみなしているのである。過去よりも現在と将来に注目することがメンタルヘルスの維持にとって大切であることを考慮すると (日湯・齊藤, 2007), 投資量の有効性が低いことは、社会関係の捉え方として適応的であるといえよう。ただし、投資量と継続意志の相関自体はつねに正であった。これは、満足度の高い関係では、おのずと投資量も増加していく傾向を反映したものであると解釈することができる。以上の結果から、仮説は部分的支持にとどまると考えられる。

さらに、どの関係においても、代替肢の水準よりも満足度の方が継続意志に対する予測力が大きかった。Thibaut & Kelley (1959) は、社会関係を継続するかどうかの判断では代替肢の水準が最も重要であると述べているが、本研究の結果はこれと異なるといえる。ただし、Thibaut & Kelley (1959) が問題としていることは、継続の意志ではなく実際に解消するという行動決定であるとするならば、代替肢の水準の方が重要であるかもしれない。その場合、満足度は最初に解消を動機づける要素となると考えられる。すなわち、現状に不満であると、代替肢の水準に注目するようになり、その評価によって解消するか否かを決めるという継時的なモデルを想定することができる。これは今後の検討課題である。

ところで、本研究で対象とした5種類の関係は、恋人、友人と、ゼミ、サークル、アルバイトという2群に大別された。前者は共同関係、後者は交換関係に相当すると考えられる。これは、Clark & Mills (1979, 1993) による社会関係の2分法と一致する。これまで検討してきたように、恋人関係と友人関係の特徴は、全般に満足度が高く、代替肢の水準が低く、継続意欲が高いことである。これらは個人的な関係における親密さを反映しているとみることができる。また、投資量にはゼミ以外の関係と差が見られなかったことは、どのような領域でも、社会関係を維持していくためには一定水準の投資が必要であることを示していると考えられる。

ここで恋人関係と友人関係に注目すると、両者は全体の平均値には差がないものの、それぞれの関係をクラスタ分析した結果は、関係の様態がかなり異なることが示唆された。まず恋人では、#2はすべての要素の評価が高く、図3-1の平均値の形状はきわめて正方形に近く、線分で囲まれた矩形の面積が最も大きかった。要するに、#2は、この関係が考え得る最良の関係であると感じている人たちによって構成されているのである。この場合、関係が失われると生活全般の成果が大幅に低下することは明らかであり、相手への依存度が高いといえる。逆に、#3は線分で囲まれた矩形の面積が小さく、恋人との関係とは思えない低い水準である。#3で関係が維持されている理由は、代替肢の水準が低いためだけであろう。それゆえ、早晚関係は解消されると予想される。これに対し、#1は#2に近いものの代替肢の水準が上昇していることから、#2よりも恋人以外の領域が生活に占める比重が大きいことが示唆される。#2よりも依存度が低いことから、ある程度時間が経過して#2の段階からより安定した関係へと移行した可能性がある。その一方で、#3への移行段階にあることも考えられる。本研究は関係が成立してからの時間を測定していないが、恋人における時間経過による要素の変化は、検討すべき課題である。これに対し、友人の場合、恋人と同じく3クラスタに分けられたものの、すべての要素が高い均衡を維持している#1と、投資量が低くても高い満足を得ている#2、#3とが存在する。全体に評価が高い#1は恋人の#2や#1に近いが、友人の#2では投資量が他の3変量よりも著しく少なくなっている。これは、投資量に比して高い満足を得ているという意味で、費用対効果が高い関係といえる。こうした特徴は、必要なときには支援を与えまた得られるという、共同関係に固有の相互信頼が基盤となっていると考えられる。他の関係では、このような形状を示すクラスタは存在しない。#3は代替肢の水準も高いが、恋人の#3と異なり満足度と継続意欲も高いことから、関係の解消に向かうことは予想できない。

これらを踏まえると、恋人と友人の違いは、恋人では友人の#2や#3のような費用対効果の高い関係が成立しないことにあるといえる。友人の#2が共同関係の特徴であるとする、恋人との関係は単純に共同関係といえないことになる。そこで、改めて恋人についてみると、その特徴は、最も高い均衡状態にあるクラスタ(#2)が存在することと、3つのクラスタの形状が類似し、より低い均衡を示す2つのクラスタが存在することにあるといえる。#2が端的に示しているように、人は一般に恋人に対して多くの投資を行うと同時に、それに見合う高い満足を求める。この高度な均衡を維持できるかどうか、関係の推移を左右する。たとえば、投資量を負担と感じたり相手から

提供される利益の水準が十分でないと感じたりするなど、いずれかの要素の水準が低下すると、#3のような縮小均衡へと向かい、関係が解消される可能性が高まると予想される。つまり、恋人との関係は、投資と成果が高度に均衡していない限り維持できない、高投資高配当の関係なのである。このようにみるならば、実は恋人との関係こそ、最も投資モデルに適合するといえるのである。恋人どうしが直接求めているものは、あくまで共同関係としての高度な配慮の均衡であるかもしれない。その場合でも、結果は同じである。高度に配慮し合う配慮の均衡は、結局、投資モデルの予測式に含まれる要素の高度な均衡に帰着するからである。したがって、相互依存性理論の視点からみると、恋人との関係が不安定で長続きしない理由は、つねに高度に均衡の取れた交換を維持し続けねばならないことにあるといえるのである。

これに対し、交換関係に属すると考えられるサークル、アルバイト、ゼミはいずれも、全体的な評価が高いクラスタと低いクラスタの2群に分けられた。このうち、サークルとアルバイトは類似性が高い。これら2つの関係では、クラスタ間で投資量にほとんど差がみられなかった。これは、社会的に活動する以上、つねに一定レベルの投資量が必要となるためであろう。クラスタ間の相違は、そこからどれだけ満足が得られるかにある。評価の高いクラスタの場合、高い満足を得ていると、それに代わる関係を見いだすのは容易でない。そこで代替肢の水準の評価が相対的に低くなり、継続意志も高まるという経路をたどると考えられる。この結果は、たとえば雇用者側がアルバイト学生の定着を求めるのならば、単純ではあるが、働きやすく高い満足度が得られる職場を作ることが必要であることを示している。ゼミの場合、クラスタ間で投資量にも顕著な差がみられた。全体の評価が低い#1は投資量に比して満足度が高く、費用対効果が高い。しかし、#2は、満足できる充実した関係であるためには、自分の投資量が高くなければならないことを示している。満足するから投資するのか、投資する中で満足が高まるのか、その両方なのかは明らかでない。これは、今後の検討課題である。

本研究は、投資モデルが想定する要素を、それぞれ1つの変量で測定するという簡略な方法でも、関係の様態を明らかにすることができることを示した。しかしながら、満足度をはじめ、それぞれの要素について、複数のより具体的な項目からなる尺度を用いて測定することも検討する必要がある。ただし、さまざまな関係に共通して適用できる内容を用意することは、容易でないことも付言しておくべきであろう。これは今後の課題である。

[注]

- 1 本研究は、個人的関係と集団における関係を同時に測定して、比較することを試みるものである。それには、両者に共通する測定尺度が必要となる。そこで、投資モデルに含まれる要素について、一般性のある内容を直接尋ねることとした。この場合、サークル、ゼミ、アルバイトでは、調査対象者はそこに存在する特定の個人との関係ではなく、それらの機会の中で成立する社会関係や活動が自らの生活に対して持つ重要性を評価するかたちになる。これは、集団の中で成立する社会関係から任意の1つを取りあげ、それについて評価を求めることは適切でないと考え

えられるためである。たとえば、集団の中の最も親しい関係を指定すると、友人と区別がつかなくなる。一方また、集団の中に存在するすべての社会関係について個別に尋ね、その平均を取るといったことは不可能である。そこで、方法で示したような質問項目を用いることとした。ただし、この形式の場合、集団における活動自体の成果と社会関係のもたらす成果を区別できないと指摘される可能性がある。しかしながら、恋人や友人のような個人的関係であっても、両者を明確に区別することはできない。どのような社会関係であっても、関係を解消することは共同で行う活動を失うことも意味するのである。もちろん、活動には満足できても関係は不満であるといった場合や、その逆も成立する。事実、この葛藤が問題となることも多い。そうした場合でも、最終的な満足や不満の判断には、それら全体を考慮した結果が反映されると考えられるのである。

- 2 代替肢の水準は、当該の関係が解消されたときの影響や喪失感の程度によって確認できる。満足している関係ほど、解消されたときの影響は大きい。ただし、選択肢の比較水準の概念が注目するように、その程度は単独での活動を含めた代替肢によって得られる満足に依存する。代替肢が高い満足をもたらす場合には、喪失感は緩和され、生活全般の満足度の低下は少ないのに対し、当該の関係から得ている成果に比肩するような代替肢が存在しない場合には、生活全体の満足度は著しく低下することになる。これを踏まえ、代替肢の水準の測定には、「当該の関係が失われると）私の生活上の満足感が低下する」程度について尋ねる項目を用いた。したがって、代替肢のもたらす満足の高水準が高いほど、項目の得点は低くなる。結果を解釈する際には、この点に留意する必要がある。この場合、Rusbult (1980) の予測式にあてはめるためには、逆転項目処理が必要となる。しかしながら、本研究では、関係の特徴とりわけその望ましさを図によって直感的に把握できるようにするために、「代替肢の水準の低さ」として正項目のまま得点化した。これにより、継続意志との相関はすべて正となるとともに、結びつきの程度を図2の平均値で囲まれた面積の大小で表すことが可能となる。

[引用文献]

- Buunk, B. P., & Van Yperen, N. W. (1991). Referential comparisons, relational comparisons, and exchange orientation: Their relation to marital satisfaction. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, 709-717.
- Clark, M. S., & Mills, J. (1979). Interpersonal attraction in exchange and communal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 12-24.
- Clark, M. S., & Mills, J. (1993). The difference between communal and exchange relationships: What is and is not. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 19, 684-691.
- Clark, M. S., Mills, J., & Powell, M. C. (1986). Keeping track of needs in communal and exchange relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 333-338.
- Eisenberg, J., Harvey, H. B., Moore, D. A., Gazelle, C. S., & Pandharipande, P. (2012). Falling prey to the sunk cost bias: a potential harm of patient radiation dose histories. *Radiology*, 263, 626-628
- Fox, S., & Hoffman, M. (2002). Escalation behavior as a specific case of goal-directed activity: A persistence paradigm. *Basic and Applied Social Psychology*, 24, 273-285.
- 日湯淳子・齊藤誠一 (2007) 青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連. 発達心理学研究, 18, 109-119.
- Rusbult, C. E. (1980). Commitment and satisfaction in romantic associations: A test of the investment model. *Journal of Experimental Social Psychology*, 17, 172-186.
- Rusbult, C. E. (1983). A longitudinal test of the investment model: The development (and deterioration) of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 101-117.
- Rusbult, C. E., & Martz, J. M. (1995). Remaining in an abusive relationship: An investment model analysis of nonvoluntary dependence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 558-571.
- Thibaut, J., & Kelley, H. (1959). *The social psychology of groups*. New York: Wiley.